

Glocal Tenri



10

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.11 No.10 October 2010

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
「消えた老人問題」に思う
／深谷忠一 1
- ・ 天理教教理史断章 (58)
その他の文書①
／安井幹夫 2
- ・ 天理教海外伝道の資料 (10)
上海伝道関連史料⑩
／深川治道 4
- ・ 天理異文化伝道の諸相 (73)
コンゴ伝道に見る異文化接触 [39]
／森 洋明 5
- ・ 今日の時代における宗教批判の克服学 (22)
「宗論はどちら負けても釈迦の恥」
／金子 昭 6
- ・ 「二つ一つ」の環境学 (35)
口蹄疫問題で再認識させられた“経済動物”としての家畜②
／佐藤孝則 7
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の民族誌学 (19)
先住ハワイ人にとってのキリスト教
／井上昭洋 8
- ・ 天理スポーツ (5)
相撲と天理①
／難波真理 9
- ・ 世界平和のための宗教対話 (22)
カソリック世界：統聖職者の性的小児愛症
／山口英雄 10
- ・ English Summary 11
- ・ おやさと研究所ニュース 12
平成 22 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(1)
／天理台湾学会第 20 回国際学術大会に参加して/
第 20 回国際宗教学宗教史会議世界大会/日本宗教学会第 69 回学術大会/夏期特別講座「教学と現代 VII」の報告/コンゴ出張報告/新刊案内

巻頭言

「消えた老人問題」に思う

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

教祖 80 年祭の前年、ロサンゼルスから飛行機を一機チャーターして、団参をしたことがあります。日本文化鑑賞会という名のもとに、広く一般の人を会員に募っておぢば・日本に帰ったのですが、その中の一人にこんな人がいました。

その人は日本人男性で当時は 60 歳位でしたが、それ以前 30 年くらい前に、船員として乗り込んでいた船がニューヨークの港に着いた時に、海に飛び込んで密入国をし、そのままアメリカに住み着いたというのです。その後、日本の身内とは一切連絡をせず、アメリカで永住権を取得し、結婚もして今日に至っている。けれども、だんだん歳もとってきたので、一度夫婦で故郷に帰りたいと思うようになった。それで、値段の安いこの旅行会に参加したいのだが、実は、日本のパスポートを密入国した時に失くしてしまっていて持っていないというのです。

それで、彼の願いを叶えるために領事館に向いて問い合わせたところ、彼の密出入国については時効でお咎めなし、パスポートも再発行してくれることになったのですが、奥さんのパスポートの方が問題だと指摘されました。彼と奥さんとは、アメリカでは結婚届けを出しているけれども、日本の役所に届けていない。したがって、彼女のパスポートの苗字が旧姓のまま、アメリカの永住権・グリーンカード上の名前と一致していない。したがって、そのパスポートでは、日本からアメリカに戻る時に再入国ができないというのです。

それで、彼女のパスポートの名前を婚姻後のものに変えるべく、日本から戸籍謄本を取り寄せたのですが、なんと、ご主人の謄本には、彼が日本にいた時に結婚していた別の奥さんの名前がまだ残っていたのです。(端的に言えば重婚なのですが、日米双方で別々に婚姻届が出されれば、誰も確認のしようがないのです。)

それで、まず彼と日本の奥さんとの離婚手続きをして、次にアメリカでの奥さんとの婚姻届を出して、そして、その結婚の事実の記載がある謄本をまた日本から取り寄せて、領事館でグリーンカードと同じ名前でのパスポートを再発

行してもらって、ようやくこの夫婦が日本に帰れるようになったのです。

あれから 45 年、あの夫婦がもしまだ生きておられたら 100 歳以上になります。今、日本では、戸籍や住民登録に名前がありながら、所在の分からないお年寄りが問題になっていますが、あの時もし彼らが日本に帰ろうと思わなかったら、そしてあのややこしい手続きをしなかったら、彼らも今ごろは消息不明の 100 歳以上になっていたのではないだろうかと思ったりします。

この夏露見した「消えた 100 歳問題」に対するマスコミの論調は、行政が怠慢、民生委員などの努力が足りない、などというものが多いのですが、個々のケースをすべて役所や福祉関係者などが追跡できるほど、人々の人生模様は単純なものではないと思います。

ニューヨークで密入国した男性が、日本の奥さんとの生活を放棄した原因は、もしかすれば、奥さんの方にあったのかも知れません。しかし、30 年も無音でほっておかれた心の傷も、とても大きなものだったことでしょう。彼女が離婚届にすぐ印を押してくれたのも、もう関わりたくないという思いだったのだと思います。

所在不明の高齢者についての行政サイドからの所在確認に対して、肉親と思われる人たちからでも「知らない」とか、「関わりたくない」という答が返ってくる。冷たい肉親だと批判するのは容易ですが、彼らが一方的な加害者だとは必ずしもいえないと思います。

いずれにしても、孤独な老後になるか否かは、その人の人生の軌跡によって決まることは確かです。若い頃に気随気ままな人生を送っていながら、老後に皆に大切にされるということはありません。また、歳をとるにしたがって頑迷固陋の度を深める老人が、まわりの人々に慕われることもありません。

「感謝・慎み・たすけあい」の本教の教えを早く世界に広めて、人皆が、「人をたすけて我が身たすかる」心になり、孤独な老後を送る人がなくなるようにすることが、我々に課せられた只今の大事な責務だと思います。